

結核治療薬がなかった時代に、外気療法といって、きれいな空気を呼吸することで自然回復をはかるという治療にもとづく命名だったという。

一連中にあるように、戦後間もなく、石田波郷や吉行淳之介らがこのサナトリウムにいた。結句「ぼつねんとある」に、無用の建物として半世紀の時間を過ごしてきた建物への作者の思いが読める。ちなみに、今は、ネットで「外気舎」の写真を見ることができるとも。

明日は雨ゆゑに拌めぬ屈強の青を重ねる海を撮りたり
花美月

沖繩旅行の歌。沖繩の海の色を「屈強の青を重ねる」とした工夫に注目。ただ「雨ゆゑ拌めぬ」の「拌む」は

美童みどうの清き歯並みと謳われし白波寄する恩納浜見ゆ

安仁屋洋子

恩納浜をうたう民謡の一節に、「美童の清き歯並み」とあるのだろう。引用とはいえ、いかにも美しいので、ついこの一首を採ってしまった。

頭から小豆の匂ひ浴びて行く石田饅頭店のうらみち
碓博視

わが家から二子玉川駅に歩いてゆく道筋に団子や饅頭を売っている店があり、朝、店の裏を通ると、換気扇から小豆を煮る蒸気が噴き出して、この作と同じような体験をすることがある。私はそれを短歌にしようとしたことがなかったので、意表をつかれた思いがした。この作者は、「浴びて」の一語をえて、自己戯画化に成功

したようだ。

六色の虹色はためく街を過ぎ虹の足追いシリコンパ
ラーへ
三宅徹夫

「六色の虹色」は、言うまでもなくLGBTのシンボル・フラッグ。つまり「六色の虹色はためく街」はサンフランシスコである。ここは、サンフランシスコ上空からシリコンバレーにかけての空に実際の虹がかかっていた、という設定である。虹の旗はためく街から本物の虹の足を目ざして行く、という趣向。六〇キロちよつとの距離だから、車で行けばすぐである。

舞踏なしときに小走り鶴鴿は畑を横切り橋渡りたり
水本光

七種もの野鳥が登場する今月の一連中の作。農作業の手を休めて鶴鴿の動きを目で追っている、何十秒間かの視線の動きが主題である。動きを描写する丁寧な用語。

草の芽の木の芽のほふこれの世の湿り帯びたる女
鹽川郁子

今月の六首は、ややクラシックに、そしてしみじみと、雛と亡き母上をうたった読みごたえのある一連だった。この一首、リフレインを前面に出して、音楽性を強調し、意味を少なくして特色を出している。

夜もすがら駆ける粉雪地を這いて渦巻きおらぶ一月
の聲
加賀谷実

雪国の冬の風吹く夜の荒々しさを重厚にうたう。「駆ける」「這う」「渦巻く」「おらぶ」と四つの動詞それぞれが、十全に機能している。